

## 授粉用マルハナバチの逃亡防止技術と生態リスク管理技術の開発

### 1 中核機関・研究総括者

(独) 国立環境研究所 五箇 公一

### 2 研究期間

2005～2007 年度（3 年間）

### 3 研究目的

生態リスクの懸念から、2005 年 6 月施行予定の「特定外来生物被害防止法」においてセイヨウオオマルハナバチを特定外来生物に指定することが検討されている。しかし、本種の農業生産に対する貢献度は大きく、規制に向けた議論においては科学的データに基づく生態リスク評価が必要とされる。同時に、今後本種の利用を有効に継続する上でも、生態リスクを回避する管理技術を開発しておく必要がある。このためセイヨウオオマルハナバチの野外定着実態を把握するとともに、在来マルハナバチおよび植生に対する影響を調べて生態影響に係る情報の集積を図るとともに、セイヨウオオマルハナバチ野生化個体の有効駆除法・ハウスからの逃亡防止策を開発し、さらに代替技術として在来マルハナバチの有効利用技術を開発する

### 4 研究内容及び実施体制

- ① セイヨウオオマルハナバチの生態リスク評価研究（東北大学、岐阜大学、筑波大学、(独) 国立環境研究所）  
野外調査および分子遺伝学的研究によってセイヨウオオマルハナバチの生態リスクを明らかにする
- ② 商品マルハナバチのリスク管理手法の開発（玉川大学、アリスタライフサイエンス（株）、アピ（株）、愛知県農業試験場、(独) 国立環境研究所、(独) 野菜茶業試験場）  
物理的・化学的手法を用いてセイヨウオオマルハナバチ防除技術を開発するとともに、飼育技術・遺伝学的技術を用いて在来マルハナバチの商品化技術を確立する

### 5 目標とする成果

セイヨウオオマルハナバチの生態リスクに関する科学的データが整備され、具体的管理手法が確立され、有効な代替技術として日本在来マルハナバチの商品化を可能とする。これにより我が国における農業生産と環境保全の両立を目指した生物資材利用のモデルケースとして、今後の生物資材産業の発展と外来種管理の進展に大きく貢献することが期待される。

# 授粉用マルハナバチの逃亡防止技術と生態リスク管理技術の開発

